眞宗同學會大會紀要

第九回眞宗同學會大會は、昭和二十八年十一月二十二、二十三の兩日、大谷派本願寺別邸、涉成園闌風亭に於て開催された。

以下は兩日に於て發表された會員十四氏の研究發表の概要である。

釋迦教と彌陀教

稲葉　秀賢

『教行信證』教卷の標擧には

大無量壽經眞實之教　淨土眞宗

と示されてゐる。そしてこの淨土眞宗を受けて、「謹按ニ淨土眞宗一」と淨土眞宗の大綱が說かれる。然るに、この淨土眞宗を宗祖は、『末燈鈔』に「選擇本願は淨土眞宗なり」と云ひ、又『和讃』には、聖淨相對して、「念佛成佛これ眞宗」、要弘相對して、「弘願眞宗にあひぬれば」、專雜相對して、「眞宗念佛きゝえつゝ」といひ、愚禿すゝむるところ更に私なき意味で、「智慧光のちからより、本師源空あらはれて、淨土眞宗をひらきつゝ、選擇本願のへたまう」とも云つてゐられる。殊に教卷の標擧を承けて信卷には、「橫超者願成就一實圓滿之の眞教眞宗是也」とも示してゐられる。これに依て淨土眞宗とは選擇本願であると云はねばならない。從て教卷の所顯は眞實之教が選擇本願であることを明かにせんとするものであつて、眞實之教淨土眞宗は選擇本願でなければならない。

然るに教卷に、「夫顯ニ眞實之教一者則大無量壽是也」と云ひ、『略本』でも「言レ教者大無量壽經也」と示されてゐる。而も『大無量壽經』が釋尊の說かれたものであることは云ふまでもなく、又教と一般に云ふ時、それは常に釋迦に屬する。それ故に、古來四法に就いて教をたゞ能詮の言教として所詮の法に對せしめ、教はやゝもすれば輕視されてきた觀がある。眞宗にあつて、釋迦が無視され易いのもこゝに原因する。けれども淨土眞宗が佛教である限り、釋迦教であることは否むことはできない。こゝに彌陀教（選擇本願）と釋迦教との關係が重要な課題とならずにはゐない。

眞宗相承の歷史に於いて、釋迦教彌陀教の二尊教を立てたのは善導である。即ち歸三寶偈には「今乘二尊廣開淨土門」と云ひ、序題門には「然娑婆化主因ニ其請一故廣開ニ淨土之要門一安樂能人顯ニ彰別意之弘願一、其要門者卽此觀經定散二門是也乃至言ニ弘願者如ニ大經說一」とも示してゐる。更にこの對立は『定善義』の應聲卽現の釋、『散善義』の二河譬にも顯著である。かくの如く、二尊は一應發遣と

招喚の關係に於いて對立的に見えつゝ、二尊二教は二尊一致の選擇本願に歸せられてゐる。これは何を示すのであらうか。蓋し、淨土眞宗もそれが佛教である限り釋迦教であることに變りはないけれども、その釋迦教は彌陀教に於いて、眞實の意義を見出すのであつて、要門の教主が釋迦に歸せられ、弘願の教主が彌陀と示され、且釋迦教に卽して聖道難證、彌陀教に就いて淨土一門可通入路と顯はされたのは、恐らくは機の自覺に基づく佛陀の再發見に依るものではないであらうか。かくて釋迦教を通して彌陀教は發見せられ、彌陀教に依て釋迦教がその眞實性を獲得する。こゝに教卷の所顯があるのであつて、その大意釋では彌陀、釋迦の順序となつて、それは歎異鈔第二章に對應する。これ彌陀教によつて釋迦教の眞實性が發見せられるからである。『大經』が眞實教とせられるのは、彌陀の本願を說くからである。從て教卷は教則願であることを示すものであり、この願の上に行信證が展開するのである。かくの如く善導、元祖にあつては釋迦彌陀の順序で示されたのが、宗祖では却つて彌陀釋迦の順序になつてゐる。こゝに於いて釋迦教と彌陀教の關係は、相對的には釋迦教に依て彌陀教があらはされるけれども、絕對的には彌陀教に依て釋迦教が眞實たり得る。選擇本願を說くことに於いてのみ、『大經』は眞實たり得るのである。

釋尊時代の印度の國情

春日　禮智

釋尊時代の印度の國勢は、印度人の理想とする轉輪聖王の統一國家ではなかつたが、暗黑を以て知られる印度歷史上、稀に見る文化的にも、政治的にも活潑であり、光輝ある時代であつた。しかしその內容の詳細に亘つては、歷史上不明の點も少くなかつたし、假令それが解つていても、異說紛々、眞僞の解決せぬ問題が次から次へと殘つてゐた。今私のこの研究では、從來充分研究さるべくして研究し盡されなかつた一切經の綜合的研究の結果えた資料を基としてまとめ上げたのであるが、かうした梗概では、その百分の一も述べ盡すことができないので、その中の二三の大問題の結論だけ、ここに述べておきたい。

當時の印度は十六大國、四大國等の名に依つても解るやうに小國分立の時代であつたが、それが前代より興隆し來つた民族發展の勢に乘じ、統一國家を目指して統合されつつあつたことは事實である。それが印度を中國と呼び、須彌山說や轉輪聖王の思想の生れてくる所以である。中でも東方の雄、摩竭陀國と、西方の覇者、拘薩羅國とは、共に新興國家であるが、國力旺盛、旭日昇天の觀があり、新興の宗教—佛教の熱烈な護持國であつた。摩竭陀はもとアンガ國の屬國であつたが、頻婆娑羅王は多聞天の太子として生れたと言はれる位で、その若い時代に稅金のことからアンガに向つて戰火を開き、アンガ王を殺してその國を併呑し、一躍大國となつた。王は佛より五年年少で、十五歲にして卽位、その卽位十六年に佛の教化をうけ、三十七年間佛と共に在世した。その領治はマガダ、アンガ二國四萬二千聚落に及び、兩國の人民の賞讃する所となつた。その都は王舍城で、それは同時に佛教の東方に於ける最大の據點であつた。